

団体の概要	団体名	共同作業所 ほっとはうす(熊本県水俣市)	
	活動開始年	西暦 1998 年 11 月 活動開始 西暦 2000 年 4 月 熊本県心身障害者通所援護事業認可	
	メンバー	人数	< 役員数 > 5 名(運営委員)、3 名(監事) < 事務局スタッフ数 > 4 名(施設長・介護スタッフ 3 名) < ボランティア数 > 下記参照
		構成	利用者 = 「メンバー」11 名(胎児・小児性水俣病患者 9 名その他 2 名) ボランティア = 地元高校・県内大学各 2 校(活動内容により必要人員を派遣してもらう)、地元小学校教師 5 名、福祉施設及び病院職員 3 名、生協活動に関わる主婦 3 名、出前授業で提携している小学校の児童、活動内容に応じて参加いただく人多数あり
予算規模	平成 13 年度概算 ・収入 ¥8,820,000 支出		
団体の目的	<ul style="list-style-type: none"> ・障がいを持つ人が働き、出会い、交流する場 ・障がいを持つ人が広く社会に関わることを大切にする ・障がいの種別や程度にとらわれない、誰でも参加できる地域に解放されている場 ・どんなに障がいが高くても、地域に暮らし続ける意志を支え、応援する ・水俣病事件を語り伝える 		

注：「障害」という言葉の「害」という漢字を使うことに違和感があるという意見を受けて、「障がい」という表記を用いている。

ボランティア活動の概要

「ほっとはうす」は胎児性水俣病患者などの障がいを持つ人の共同作業所であり、喫茶コーナーの営業、押し花、ポプリなどの自主製品の製造・販売などを行っている。また、メンバーとスタッフの協働で、水俣病を伝える活動を行っている。

< 受け入れたボランティアの活動 >

- ・自主製品である押し花、ラベンダーポプリの下準備作業
- ・出前喫茶での運搬、洗い場、ウェイトレス等(高校生)
- ・押し花栞作りワークショップのための準備(対象は出前授業受け入れ先の児童)
- ・研修旅行(宿泊を含む)の介護ボランティア(大学生)
- ・「ほっとはうす」が関わるイベントでの手伝い
- ・「2001・水俣ハイヤ」に参加する車イスのメンバーの介添え

<学校におけるメンバーとスタッフによるボランティアと仕事を兼ねた活動>

- ・社会人講師の位置づけで出前授業の形式で地域の学校に出向き、総合的な学習の時間や人権環境教育で授業をする。メンバーとスタッフの共同トークである。水俣病事件と障がいを持つ人への理解を深めるための啓発活動であり、水俣病事件を伝え、障がいを持つ人が地域で暮らすことを伝える。
- ・学習発表への協力（踊り、歌）、押し花ワークショップのアイロンがけ作業

活動を立ち上げた経緯

子ども達に社会の中で様々な生き方をしている人々を学ばせることに積極的な教師達との出会いがその一歩であった。その教師達が学年や職員会議にはかり、学校長の理解や共感を得て、取り組みが学校単位で始まった。最初の学校での様子が教師仲間に伝わり、次の学校からの依頼につながった。

「ほっとはうす」側としては、運営的に人件費に当てられる経費が乏しいため、研修旅行等に必要の手伝いをボランティアで補填したいというニーズもある。

高校生

水俣市内の高校（2校）にはボランティア・サークル「インターアクトクラブ」があり、サークル単位の取り組みが長年継続している。

きっかけは「ほっとはうす」の活動が新聞報道等で取り上げられたことにもある。「ほっとはうす」のメンバー（障がいを持つ人）が自費出版した写真集を見た高校放送部の生徒が、放送コンテストに出品するビデオ作品のテーマに「ほっとはうす」の活動を選び、その作品制作をきっかけに放送部としての自然なボランティアの関わりが始まった。ボランティア活動の内容は、喫茶コーナーの手伝いから店内レイアウトまで多様で、若者の斬新なセンスで楽しみながら、「苦のボランティアでなく楽のボランティア」をしている。

「ほっとはうす」の運営支援の活動であるパンの注文をクラス単位でまとめた生徒もいた。

顧問の教師が積極的であったこと、殊更にボランティアとするのではなく、社会の多様な人々と多様な関わりを持つことを大事にし、放送部としての部活動に見事に取り組んでくれたことも、長年多様な継続する取り組みになっている要因である。

大学生

以前より水俣病支援の伝統があり、教授やスタッフの友人の紹介がきっかけになった。医学部の研究サークルの熱心な学生が中心になり、新入生から卒業年次までの6年以上を関わってくれる。交通費等も部費の中から工面して、熊本市から参加してくれている。

その他

学校で行った出前授業がきっかけとなって、児童・生徒がボランティアに来てくれるよ

うになることもある。

活動を行ううえでの困難点と工夫

ボランティアに来てもらう場合、あるいは、こちらから出前授業に学校に出掛けるときの移動手段確保が大変だった。交通機関を利用してボランティアに来てくれる学生に対する、交通費の援助をできるシステムがあればよかった。

学校との連携を行う際の工夫

<工夫：地域が抱える課題（水俣病事件）への取り組みを前向きに行った>

1951年5月に水俣市で公式発見された公害・水俣病は、世界に類例を見ない悲惨な被害をこのまちにもたらした。しかし、そこから貴重な教訓として、人権・環境・福祉の大切さを学んだ。それを宝物として子ども達に伝えたい。差別や偏見のない世界を21世紀こそ実現するために、障がいを持ち、困難な状態にありながらも、前向きに生きる人生を歩んで来た患者さんや障がいを持つ人がいることを「希望の見える現実として」子ども達に伝えたい。そうした思いをもって活動してきた。

その結果、悲劇の水俣から21世紀の希望の見える宝物としての水俣をメッセージできた。そして、障がいを持つ人は、不自由でもなければ、かわいそうでもない。働いて生きる姿を子ども達に紹介できた。水俣病を地域のタブーから開放し、地域福祉に一石を投じることができたと言える。

<工夫：提供できるプログラムがオリジナルなものである>

「ほっとはうす」オリジナルの「水俣病を伝え、障がいのある人の暮らしを伝える」プログラムは、水俣に生きる子ども達に自然に水俣病や障がいを持つ人との共生を学ぶ機会を提供できている。

<工夫：学校側のペースを尊重する>

初期の段階で教師に無理をさせず、受け入れ準備が整うのを待った。また、「ほっとはうす」内にある喫茶コーナーを利用して、教師との打合せを丁寧にした。なお、教育委員会の推薦があれば、学校長の承諾が早期に得られたと思う。

<工夫：子供達からも活動拠点に来てもらう>

学校に出向くだけでなく、校区の児童に放課後や休日に「ほっとはうす」に遊びに来やすい雰囲気を作った。子ども達は素直に障がいを持つ人がいる場を訪ね、まちで出会った時に「ほっとはうすの　　さん、こんにちは」と声を掛けてくる。

こうした取り組みもあって、地域の人達やPTAのあいだで「ほっとはうす」の活動は

好評である。

<工夫 : ボランティア募集にはボランティア・センターのネットワークを活用>

ボランティア募集は、市広報誌、ボランティアニュースへの掲載依頼や、友の会会員等による口コミも活用しているほか、ボランティア・センターに必要な応じてコーディネイトを依頼している。

また、水俣市ボランティア連絡協議会に加入することで、同会に加入する市内の他のボランティア団体や高校のボランティア・サークルとの情報交換や横の連携が可能である。

今後の課題と展望

今後は社会福祉法人化を図り、働く場、交流の場をさらに発展させたい。

また、施設ではなく、地域で暮らし続けること＝コミュニティライフを実現させるために、有償・無償の地域の人材を活用したい。公的支援と民間支援、そして自ら汗して必要な経費を生み出していく努力を目指したい。

そして、水俣病の教訓を人権・環境の問題から福祉へ広げ、障がいを持つ人の福祉の充実へとつなげたい。

(団体代表によるレポート、団体代表へのヒアリング調査、団体資料より作成)

<事例のポイント>

「ほっとはうす」は、水俣病が残した貴重な教訓や、障がいを持ちながらも前向きに人生を歩む人々がいることを、子供達に伝えたいと考えている。伝えたいメッセージがあることが、学校との連携を積極的にさせている。そしてそのメッセージを託したプログラムは、「ほっとはうす」オリジナルのものであり、そうした「オンリーワン」の活動内容を持っていることが、学校側からも連携を求める要因となることを示している。

学校との連携のためには、まず活動に対する理解を担当教師から得ることが大切である。そして、その理解を教師個人から、学校の「組織」としての理解に広げていかなければならない。団体側が連携を焦ったり、連携に至るまでの期間の長さにも不満を抱くようになると、間に立つ教師が困難な立場に陥ることになる。「ほっとはうす」の場合は、担当教師と丁寧に打ち合わせを進め、学校側の受け入れ準備が整うのを待って、相互の理解を醸成していったことが功を奏している。

また、ボランティアセンターの持つネットワークを活用したり、ボランティア連絡協議会加入によって、地域との交流や情報交換を行っている。この団体の場合には、地域に理解してもらいたい、という考えが強いためにこうしたことが自然に実現しているが、そうではない団体も多いだろう。ボランティア・コーディネーターは、団体が内向きにならず、他の団体など外との交流にも目を向けるよう、意識付けをしていくことが必要である。